

2022年度

# 一般選抜C日程

国語総合

(古文選択可・漢文を除く)

[60 分]

## 〔共通問題〕

〔一〕〔現代文〕次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

私たち人間は、どのようにして自分のことば（母語）をおぼえたのか、あまり記憶がない。日常生活からかけ離れたむづかしい語彙や、最近どんどん現われて来る新語などは、たとえば、はじめて聞いたのが誰からだったのか、どの新聞に出ていたかと、最初の出会いをおぼえているが、ここではそれぞれの言語にユウキユウの過去からそなわっている、まるで水や空気のように当然と思われている語彙について考えてみよう。こうしたことばは子どもの時から、いつの間にかおぼえて知っているので、テ、アシ、メ、クチ、ソラ、アメ……などのことばが、なぜそのようになっているのかと問うたりはしないし、どんなに批判精神の強い革命家でも、我々がアシと呼んでいるものを指すのにアシというオトをあてはめるのは不合理だから取り換えようなどとは言わない。

今は単語について述べたが、文法についても同じようなことが言える。たとえば、「ラレ」がなぜ受身の意味を表わさなければならぬのか。皆が皆こういう疑問を出しはじめたら、世の中の歯車はまわって行かない。だから、ことばのことをこせこせとあげつらう人は、少し頭が変か、世の中の和を乱す困った人だということになる。言語が集団を決める最も強力なめじるしになるわけは、このことからよくわかる。ことばがそのようになっていくことにイギを申したてる人はまずいからだ。

そうであるのに、日本語は美しいことばだなどという。私たちはソラとかアオイとかのオトを、熟慮の上で、美しいからと言って選んだのではない。まだもの心つかぬうちに、無理やり、社会の暴力によっておぼえさせられたにすぎない。暴力というのは決してコチヨウではない。選択の余地がなく、それを受け入れないと生存もむづかしいからだ。こういう個人がただただ受け入れるしかない社会のシステムを、ソシユールは「社会的事実」と呼び、言語は社会的事実の中でも最も強力な圧力を及ぼすものだとして述べたのである。社会的事実——つまり、その社会を成り立たせている個々人の意志をこえて、その上にクンリンするシステムである。

ことばはこうして、誕生のシユンカンから人間をしばりつける。その子が長じて、自分は日本語をすてて、英語をしゃべる人間になりたいと思っても、もうことばの取り換えはできない。どんなことばの才に恵まれている人間でも、十二歳をすぎると、母語をカクトクしたようなくらいには他の言語を身につけることはできないのである。

こうして一度身につけたことばは、批判せずに、ただ美しいと言って讚美することが世間にうまく受け入れられる方法である。しかし、このような、さめた言い方は、実態に反する。アシがアシでメがメであることは、誰にとつても、必然で自明のことであるだけでなく、絶対に正しいのである。

しかしよく考えてみれば、メがメであるのは必然の関係、つまり、何かわけがあつてそうなつてゐるのではない。メという単語は、メというモノ（もつと厳密に言うると、メそのものではなく、それから得られた概念）と、メというオトとが結びついてできている。そして、この指されるモノと、それを指し示すオトとの間には、必然の関係はなく、言語ごとに随意にきまつてゐるということ、ソシユールは「記号の恣意性」と呼んだのである。このような「恣意性」の原理は、個々の記号のみならず、「分節」をはじめ、言語のすべての領域に及んでゐるので、この原理の重要性ははかり知れないのである。

現代世界では、多くの人が何か一つの外国語にあれていて、言語ごとに単語がちがうということを経験から知つてゐるから、この「記号の恣意性」は説明されるとすぐにわかるが、それが、言語というものの全体にどのようなかわりを持つてゐるかについては、もう少し深く考えてみなければならぬ。

古代の人だけでなく現代人もまた、こうした説明を受ければわかるはずだが、まだまだ、モノとことば（オト）とはイコールで、ことばを出せばモノが呼び出されるという、コトダマ（言霊）的な感覚をもつてゐる。人は忘れられない人を心の中に呼び出そうとして、その名（オト）をひそかに口にするのもそうした感覚の現われであるが、名は決して、その人の本質を表わしてゐるのではなく、もとをただせば憎むべきかもしれないその親が与えたものである。

プラハの皮肉な思想家フリッツ・マウトナーはおもしろい一口話を、かれのタイチヨ『言語批判への手がかり』（一九〇六年）に紹介してゐる。

ある、人のいいチロル人がイタリアに旅行して帰つてから、あそこはいい土地だが、困つたことにウマのことをカヴァロと呼ぶ頭の変なやつが住んでゐるところだと話してまわつたという。チロル人はドイツ語を話してゐるのだが、日本にも昔話にありそうなタイプの人のようである。マウトナーは、「これほど頑固で素材ではなくとも、私たちもみんな似たりよつたりだ」と言つてゐる。

記号の恣意性——指される概念とオトとの結びつきが自由であると言ふばあいに、問題は、指される概念の方も、あらかじめ決まつてゐるのではない。このことは大変重要な点である。

いまのチロル人の例でいえば、この人はウマはウマで変らないのだから、カヴァロなどと言わないで、これをウマにとりかえればいいのだと思つてゐる。これはたとえば、日本人が、ウマは英語では何と云うんだと質問するときの、その態度に表われてゐる。

しかし英語では、よく知られてゐる horse のほかに、「乳を出すウマ」mare もある。だから英語では「馬の乳」という場合、horse milk とは言わず mare milk でなくては、おかしいのである。

日本語で一つの語で呼ばれてゐるものが、他の言語ではいくつにも分れていたり、また逆に他の言語で一つのものが日本語ではいくつにも分れてゐることがある。こうした点では、日本語のミスとユは、大変面白い例である。ミスもユも化学から見た物質としては、H<sub>2</sub>O であつて変

【図1】

英語：

purple	blue	green	yellow	orange	red
--------	------	-------	--------	--------	-----

シヨナ語：

cips <sup>u</sup> uka	citema	cicena	cips <sup>u</sup> uka
-----------------------	--------	--------	-----------------------

バッサ語：

hui	ziza
-----	------

るところがない。しかし、日本語でミズをくださいと言ったら必ず冷たいのが、ユと言えば、必ず熱いのが出てくるはずである。このような次第であるから、英語の辞典で water のところに「水」という訳がついているのは正確ではない。<sup>(4)</sup> この二つは等価ではないのである。このことから言えるのは、意味の世界の分け方もまた、恣意的だということである。かりに意味が各言語に共通に作られているならば、世界中の言語はすぐに一つになれる。さきほどのチロル人のように頑固にならず、ウマというレッテルをカヴァアロにとりかえればことばは一つになれるはずだが、そうはならない。そのことをソシユールは、<sup>(5)</sup> 言語は「単語帳、つまり、ものの数だけある名前の一覧表ではない」と述べたのである。

意味の世界がそのようになっていくだけではなく、じつはオトの世界そのものがそうなのである。母音という一つの宇宙を、五つにしか分割していない日本語から、八つに分割している朝鮮語世界にどのように橋を渡したらいいのか、この二つの原理を<sup>(6)</sup> バイカイする方法はな

このように、言語においては意味の世界もオトの世界も相対的で、どちらかが、どちらかに先立ってきまつていてのではない。<sup>(6)</sup> オトが意味を決めると同時に意味がオトを決めるのである。このオトと意味とがたがいに会って、たがいを確定しあうところに言語（記号）というものが生まれる。そして、こういう方法を用いないかぎり、人間は、外界、自分をとり巻く環境を把握することができないのである。そして、その把握のしかたは、恣意的であるから、言語ごとにすべて異なるのである。

このことをソシユールは、「観念とオトとの仲をとりもつ」ところに、<sup>(7)</sup> ことは独得の性質があり、「観念とオトの連結は<sup>(7)</sup> テツテイ的に恣意的なのである」と述べている。そうして、もともと、すべての人類にとつて一つであるはずの、生理物理的なオトの世界、そして一つの連続した世界の中に意味の区分を設けて、その言語固有の単位を作る作用は、「分節」と呼ばれる。この用語はすでにドイツ語の伝統の中にはあったのだが、それをソシユールは言語全体を貫く原理として、印象ぶかい方法で登場させたのである。

<sup>(7)</sup> この分節の仕方が言語ごとに異なり多様であるかを、ヨーロッパのなじみのある言語とはまったく異なる、ホピヤナヴァアホのアメリカ・インディアン<sup>(8)</sup> の言語の例を引いて、実証的に示したのは、サピアとウォーフであった。その豊富な実例を一つ一つ味わってみることは、とりわけウォーフの著作にゆずることにして、ここでは<sup>(8)</sup> メイカイさと説得性ですぐれている例を一つだけ、グリーソンの「記述言語学入門」(一九五五年)の中から引いておこう。(【図1】参照)

この図では上から英語、次にローデシア<sup>(注2)</sup>のシヨナ語、リベリアのバツサ語と三つの言語が対照してあって、それぞれ色を表わす名前が示してある、三つの棒の長さ（人間の眼が知覚できる色の範囲）は同じである。左端で人間の目にとっての色の世界が終り、それよりも左は、紫外線になってしまつて見えない。赤で終る右端のさらに先は赤外線となつて不可視である。

これら三つの言語を話す人の、色を感じる眼の能力それじたいは、同じだということが示されている。ところが英語ではこの共通の色の世界を六つに、シヨナ語では三つに（左端と右端は、つまり紫と赤は同じ語で指されていてつながるからだ）、バツサ語では二つに分けている。そしてバツサ語は緑から紫までと、黄色から赤までをそれぞれ一まとめにして呼んでいる。

このことは、バツサ語を話す人の眼が悪いのではなく、このようにして色を把握するように、かれらの言語が決定しているということである。私は、こうしたまとめが、ほんとうに実態に即しているかどうか、問題がなくなはないと思うが、「分節」という概念を説明し、それによつて、現実世界とははっきりと区別される言語固有の世界、つまり意味の世界というものをわかりやすく示していると思う。

（田中克彦『言語学とは何か』による）

（注1）ソシュール……フェルディナン・ド・ソシュール（一八五七―一九一三）。スイスの言語学者。

（注2）ローデシア……現在のザンビア共和国・ジンバブエ共和国に当たる一帯が、イギリスの植民地であった時期の旧称。

問一 傍線部(ア)～(コ)のカタカナで表記された語句と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は 1 ～ 10。

- (ア) ユウキユウ
- ① ユウユウジテキの日々を過ごす
  - ② ユウダイな風景に感動する

- 1
- ③ ユウモウな武士の姿を描く
  - ④ ユウゲンな時間を無駄にしない
  - ⑤ ユウイな立場を保つ

- (イ) イギ
- ① タイギメイブンを掲げる
  - ② ジギを得た発言だ

- 2
- ③ 日本の政治はダイギ制だ
  - ④ 虫が枯れ葉にギタイする
  - ⑤ 情報のシンギを確かめる

- (ウ) コチヨウ
- ① カッコとした自信を持つ
  - ② 会社でコヨウを維持する

- 3
- ③ この一年の出来事をカイコする
  - ④ コダイ広告だと指摘する
  - ⑤ コクウを見つめる

(エ) クンリン

4

- ① たくさんの書架がリンリツする
- ② ジンリンに反する振る舞いだ
- ③ コンリンザイ許すつもりはない
- ④ キンリンの景勝地をめぐる
- ⑤ リンシヨウ医として働く

(オ) シュンカン

5

- ① 蟹かたは冬がシュンだ
- ② シュンピンな動作を見せる
- ③ シュンミン暁を覚えぬ
- ④ シュンジに状況を把握する
- ⑤ 前例にジュンじて考える

(カ) カクトク

6

- ① 新事業にサンカクする
- ② カクチヨウ高く演奏する
- ③ 外界とカクゼツした環境だ
- ④ 今後の友好をカクヤクする
- ⑤ ランカクで絶滅が危惧される

(キ) タイチヨ

7

- ① チヨメイな音楽家が来日する
- ② チヨスイチの水位が下がる
- ③ 謎を解くタンチヨを求める
- ④ チヨトツモウシンで勢いよく進む
- ⑤ チヨツキンの出来事から書き留める

(ク) バイカイ

8

- ① 根菜をサイバイする
- ② アメリカの裁判はバイシン制だ
- ③ 化学反応のシヨクバイとする
- ④ 損害をバイシヨウする
- ⑤ 企業をバイシユウする

(ケ) テツテイ

9

- ① 舞台の大道具をテツシユウする
- ② テットウテツビ一貫している
- ③ 不祥事で役員がコウテツされる
- ④ 意志がテツセキのように堅い
- ⑤ 同じ分野のセンテツに学ぶ

(コ) メイカイ

10

- ① 一時中断した事業をサイカイする
- ② 中学校時代の同級生とサイカイする
- ③ 長年の悩みがヒヨウカイする
- ④ キシカイセイの一撃を放つ
- ⑤ 急な依頼だったがカイダクしてくれた



問二 二重傍線部 (X) 「自明」、(Y) 「随意」の意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は、(X) は 11、(Y) は 12。

(X) 自明 11

- ① 説明や証明の必要がないくらいわかりきっている様子。
- ② 考え方や説明の仕方に曖昧さがなく筋が一貫している様子。
- ③ 他と紛れようがないほどはっきり区別できる様子。
- ④ 認識の妨げとなるものが一切なく、境界がはっきりしている様子。
- ⑤ 判断や決定をする際に迷いが全く感じられない様子。

(Y) 随意 12

- ① 特に考えることなく、思い付きで行う様子。
- ② 他からの指示や制約を受けずに、思い通りにする様子。
- ③ 遠慮やためらいがなく、思い切って行う様子。
- ④ 個人的な考えや感情に基づいて行動する様子。
- ⑤ 相手の言動に関心も責任も持たず、突き放す様子。

問三 傍線部 (1) 「記号の恣意性」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 13。

- ① ことばは、人が物心も付かないうちに、それを受け入れないと生存も難しい社会のシステムとして覚えるものだということ。
- ② 人が成長してから、幼いときに身に付けた母語を捨てて他の言語を話したいと思っても、取り替えられないのがことばだということ。
- ③ ことばには、一度身に付けた後は欠点に目をつぶり、ただ美しいと言って賛美することが求められやすい性質があるということ。
- ④ 日本語では足を「アシ」と呼び、目を「メ」と呼ぶことは、誰にとっても当たり前のことであり、絶対に正しいということ。
- ⑤ ある言語で、モノや概念と、それを呼び表すオトとの関係に必然性はなく、意味の世界の分け方にも必然性はないということ。

問四 傍線部(2)「これほど頑固で素朴ではなくとも、私たちがみんな似たりよつたりだ」とあるが、ここで「似たりよつたりだ」とされる人の例として適切でないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 14。

- ① モノとことばとはイコールで、ことばを出せばモノが呼び出されるという言霊的な感覚を持っている人。
- ② 馬は馬なのだから、イタリア人のようにカヴァロなどということばは使う必要は無く、ウマということばに統一すればよいと考える人。
- ③ 言語の恣意性を十分に理解できず、日本語で馬と呼ぶ動物は英語では何と言うのかと質問する人。
- ④ 英語では「乳を出す馬」は horse ではなく mare と表現されるので、「馬の乳」を horse milk と言うのではおかしいと考える人。
- ⑤ 日本語で水と湯は別個の名詞であるのに、英語では water と hot water であり、どちらも water として表現するのは変だと考える人。

問五 傍線部(3)「指される概念の方も、あらかじめ決まっているのではない」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 15。

- ① 言霊信仰はことばについて一面の真理を言い当てているのであり、モノとことばとはイコールで、ことばを発することでモノが呼び出されるのだということ。
- ② あることばについて、指し示されるモノや概念とオトとの結びつきに必然性は無く、言語によって任意に決まっているということ。
- ③ ある言語では一つのことばで呼ばれているモノや概念が、他の言語ではいくつにも分かれることがあるということ。
- ④ 日本語の水と湯は、化学の観点で説明するならばどちらも H<sub>2</sub>O であるように、本来は同じ一つ概念を複数のオトで呼ぶこともあるということ。
- ⑤ 湯を単独で表わす名詞が英語にはないが、hot water という表現はあるように、工夫することで初めて異なる言語のあいだにも概念の一对一の対応を見つけられるということ。

問六 傍線部(4)「この二つは等価ではないのである」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 16。

- ① 広大な国土のなかに乾燥地帯もあるアメリカと、温暖湿潤な気候で国土も広くない日本とでは水の持つ価値やありがたみは単純に比較できないということ。
- ② 英語では horse の他に、「乳を出す馬」を指す mare もあるように、日本語で一つの語で呼ばれているものが、他言語ではいくつにも分かれることがあるということ。
- ③ 日本語では水と湯を区別するが、英語ではどちらも water として表現するように、他言語で一つの語で呼ばれるものが、日本語ではいくつにも分かれることがあるということ。
- ④ 日本語の水を英語に訳すと water になると考えがちであるが、正確には、英語の water と日本語の水とは指し示す概念がぴったりと重なっているわけではないということ。
- ⑤ ことばにおいてオトとモノとの結びつきが恣意的であるというとき、意味の世界の分け方もまた恣意的であると理解することが重要なのだということ。

問七 傍線部(5)「言語は「単語帳、つまり、ものの数だけある名前の一覧表ではない」とあるが、そう言えるのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 17。

- ① 物事を科学的に捉えるならば、少なくとも物質はどの国でも共通しているのであり、物質を表わすことばについては世界中の言語ですぐに一つになれるから。
- ② 一口話に登場するチロル人のように頑固にさえならなければ、同じウマを指し示すことばとして、ウマ、カヴァロなどと言語によって異なる単語を使う必要はないから。
- ③ 科学的に把握できる物質に限っても世の中には無数のものが存在するので、どの言語であってもその全てに名前を付けて単語帳を作成するのは極めて困難だから。
- ④ 母音を五つしか持たない日本語と、母音を八つ持つ朝鮮語のあいだで、オトの世界を分割するそれぞれの原理を橋わたしする方法はないから。
- ⑤ 一つの連続した世界の中に意味の区分を設ける仕方はそれぞれの言語に固有のものであり、しかもその分け方に必然性はないから。

問八 傍線部(6)「オトが意味を決めると同時に意味がオトを決めるのである」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 18。

- ① オトの世界に区分を設ける作用と意味の世界に区分を設ける作用とが、相互に相手を確認し合い、二つの世界の区分が結びつくことで初めてことばが生まれるということ。
- ② 言語においては、意味の世界とオトの世界との関係は常に流動的なものであり、一時的なものであっても確定的な関係を保つことは難しいということ。
- ③ オトの世界の区分と意味の世界の区分とが互いに結びつくことで、初めて人は外界を把握することができ、その把握の仕方は言語によって異なり、恣意的であるということ。
- ④ 元々全ての人にとって世界は一つの連続したものであるはずだが、その中に意味の区分を設けて、その言語固有の単位をつくることに、ことばの独特の性質があるということ。
- ⑤ モノや概念とオトとの結びつきは完全に恣意的なものであり、意味の世界の区分の仕方と音の世界の区分の仕方は言語ごとに異なっていて、極めて多様であるということ。

問九 傍線部(7)「分節の仕方が言語ごとに異なり多様であるか」の具体例として、英語とシヨナ語、バッサ語を比較したときの説明で適切でないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 19。

- ① 英語とシヨナ語、バッサ語では色の世界の分節の仕方がそれぞれ異なっている。
- ② 英語とシヨナ語、バッサ語を話す人のあいだで、色を感じる眼の能力に違いはない。
- ③ 英語を話す人が紫と赤に区別している色合いを、同じ一つのことばで呼ぶシヨナ語を話す人は、赤と紫に当たる色を一まとめにして把握している。
- ④ 人が知覚できる色の幅の中で、英語で言えば緑から紫までと、黄色から赤までの範囲の色をそれぞれ一まとめにして呼ぶバッサ語を話す人にとって、色の世界は大きく二つに分けて把握されている。
- ⑤ 英語やシヨナ語を話す人と異なり、人が知覚できる色を大きく二つに分けて呼ぶバッサ語を話す人には、色の世界が滑らかなグラデーションを持つものとして把握されている。

問十 本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選び、番号で答えなさい。ただし、解答順は問わない。解答番号は  ・  。

- ① 日本語で足を呼ぶ言葉に、アシというオトを当てはめることはごく当たり前のように思えるが、こうした一見当たり前に思えることを疑うことが言語学について考えるために重要だ。
- ② ある社会で使用される言語は、それを受け入れないと社会の中で生存することすら困難になるものであり、個人はただ受け入れるしかないという暴力的な性質を持つ。
- ③ 「記号の恣意性」とは、人を取り巻く環境は本来一つの連続した世界であるはずだが、同じ一つのモノや概念を指すことばが言語によってさまざまに異なる場合があることを指して言う。
- ④ 人の名前は必ずしもその人の本質を表すものではないが、言霊信仰を持つ社会では名前が本質に影響を及ぼすこともあると考えられている。
- ⑤ 意味の世界の分け方は言語によって異なり、それぞれに恣意的であるので、モノや概念とそれを指し示すオトとの結びつきは、同じ言語を話す人同士であっても必ずしも自明のことではない。
- ⑥ 一つの連続した世界に対して任意に意味の区分が設けられると同時に、オトの世界にも任意に区分が設けられ、この二つの世界の「分節」が恣意的に結びつくことで、人は初めて世界を把握できる。

〔選択問題〕〈現代文〉か〈古文〉かの、どちらかを選択して、一方のみを答えなさい。

〔二〕〈現代文〉次の文章は、結核という疫病の流行がつくってきた物語を紹介してそれを読み解き、最後に「わたしたちのからだは誰のものか」と問いかけたものである。これを読み、次の問いに答えなさい。

感染する病いは、病む人だけでなく、社会全体の行動や価値観を変える。死に至る可能性が高く、治療法がない場合はなおさらだ。

そして、感染する病いに関わる情報は、たんにその流通量や伝達速度が増大するだけではなく、単純化・過激化する傾向を持つ。デマが広まったり、<sup>(1)</sup>誰かが諸悪の根源に仕立て上げられたりする。コレラ流行時には、井戸の消毒をしようとした人が毒を入れていると誤解されたり、治療にあたった医師が病いを広めているとみなされて殺害されたりもした。

原因は、人々の不安である。確かな情報がなく、正しい解決策もわからないまま放置されることで、不安に陥った人々が、単純化され過激化された情報にとびつく。それが形を変えながら次々に伝達され、誤った情報による行動が重ねられてしまう。

人々の共通の恐怖の対象であった結核は、都市や地方をめぐるイメージを変え、美の基準を変えた。結核を題材にした物語が量産され、現代にまで続くドラマのパターンをつくった。健康は、当たり前のもではなくステイタスとなり、経済的な豊かさや賢明さの反映とみられた。

いったんピークを迎えたあと、結核患者数がふたたび増大してゆく一九二〇年代後半から一九四五年までは、<sup>(2)</sup>言論の自由が失われ、軍国主義が台頭し、日中戦争から太平洋戦争へと続く戦争の時代に重なる。結核の蔓延と軍国主義の進行は重なっている。これは偶然ではないだろう。病床数が圧倒的に不足し、自宅で療養せざるを得ない患者があふれるなか、国家予算は戦争の遂行に注ぎ込まれた。

同時に、病気になるのは本人のせいであるという「体質遺伝説」が、様々な媒体で主張され、定着していった。「体質遺伝説」は、病気を社会の課題ではなく個人の体質の問題に、さらにはそのような体質を生む血統の問題にすりかえた。同時に結核は「亡国病」と呼ばれ、患者は国を滅亡させる元凶とみなされた。そうしたまなざしは、民族の遺伝子を向上させるためには悪い血統を絶やしていかなければならないという、優生思想に結びついた。結核患者は子供ができないように断種すべきであり、具体的には卵管結紮が簡易かつ効果的であると、積極的に提案する医師の文章が残っている。優生学の見地に立つ医師は、産児制限や断種は民族の遺伝子向上という「予防医学」には避けて通れない処置と考え、医学と政治はともにそのために手を取り合わねばならない、と述べていた。結核患者のからだは、どのような人が正しい国民で、どのような人がそうではないか、という排除の境界線を決定するための、舞台のひとつとなった。

排除の対象の選択は、きわめて恣意的であると同時に、その範囲は無制限に拡大していった。例を挙げるなら、結核にかかっている割合が高いと根拠なく断定された集団には、中国の人々、アイヌの人々、共産主義やテロリズムなどの「過激思想」を抱く人々などがある。

また、結核と並んで、梅毒や淋病などの性病への感染も、阻止すべきものとしてしばしば議論の対象になったが、それらの病気にかかっている割合が高いとされた人々には、同性愛者、精神疾患を病む人、接客業に従事する人、映画館を利用する女性、おしろいを塗る女性などがいる。

スーザン・ソントグは、病気の隠喩化を分析した（「隠喩としての病い」）が、結核も、人々の恐怖心の鏡として、雄弁なメタファーとして機能した。結核と同じくその「感染」を厳しく防止すべきものとして、社会主義、共産主義、民主主義などが批判の対象となった。

戦争の時代に突入すると、健康は国民の義務とされた。病む者は、国民の義務を尽くせない存在として批判された。病む者への批判は、正しい者と批判されるべき者の境界線がどこにあるのかを、その都度人々に示す舞台劇の効果を持ち、「正しい国民としての適切なるまい」は、ますます厳格なものになっていった。

「正しさ」が強く求められるにもかかわらず、その要請が抽象的・道徳的なレベルでなされる。何が批判されるべき対象なのかは明確に示されることがなく、たびたび変化する。新しい批判対象が次々にあらわれ、新しい基準が書き添われてゆく。このような社会においては、人はつねに不安を抱えなくてはならない。身近な人々との違いを確認することで、自分の正しさをつねに示さなくてはならない。

国家予算が、患者を受け入れるベッドの確保よりも戦争に注ぎ込まれているという大きな状況に対する批判は、言論の統制と同時に消えた。代わって台頭した、個人の体質や血統に病気の原因を求める言説は、患者の断種手術を現実のものにした。ハンセン病患者への断種については広く知られているが、結核もその対象になっていた。

このような状況は、何に資するだろうか。ジョルジョ・アガンベンは、〈排除による包含〉という概念を説いている（『ホモ・サケル』）。ある集団から誰かを排除することは、集団の構成員の自尊心を高め、結束を強める。誰かを排除し、自分が排除する側にまわることで、自分には価値があるという感情を鼓舞するのである。

戦時下の日本でも、「非国民」が厳しく糾弾された。結核は、軍国主義の維持のため、戦争の遂行のために、巧妙に利用されたのである。

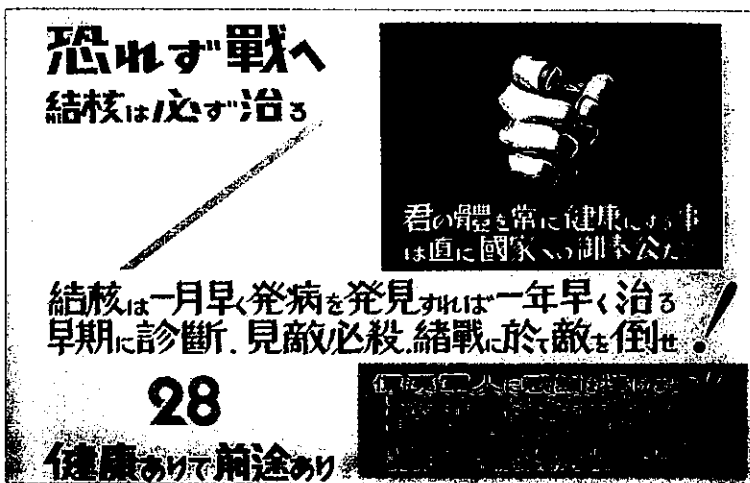
ア



ポスター(A)



ポスター(B)



戦いのメタファーは、対象と自己を、共存不能な、やるかやられるかの関係にあるものとして、人々に認識させる。このポスターの場合だと、わたしたちは意志の力で身体を管理して健康を勝ち取らねばならず、病気になるのは意志の弱さや注意力の不足による敗北であり、われわれは敗北を喫しないために存在をかけて戦わねばならない、ということになる。

同時に、健康な者は強く賢い者で、病気になるのは弱く愚かな者とされる。「健康は親と國への恩返し」「健康ありて前途あり」という言葉は、病んだ者には親への恩返しはできず、前途もないのだと、見る人に訴えかける。

③ このようなレトリックは、人を追いつめる。感染・発病しない保証は誰にもない。その不安を消すために、排除されたり批判されたりする側に立たないよう、規範に過剰に適応してゆくのである。ここで対象としたのは、明治から戦前期の結核と文化だが、こうした命の選別をめぐる議論は、決して遠い過去のものではない。

結核患者自身の表現を検討するとそれらは、医学や政治の世界で描かれる患者の姿とも、結核をめぐる文学作品やドラマとも、まったく違っている。しかし、患者自身の表現が広く紹介されることはいまだに少なく、また、そもそも彼らがこうした表現を書き残さなければ、それは誰にもわからないままだった。

異なる者を安易に排除する流れを変えるためには、まずは当事者が、自分の思いや置かれた状況を、率直に言えることが肝要だ。そのためには、彼らの物語を聴く場所がある。伝わらないと思うとき、人は口を閉ざす。だからこそ、当事者の語りに耳を傾け、想像力をめぐらせる場所が必要なのである。

医師や官僚の言葉と、患者自身の言葉は、一般に異なる文脈に置かれる。医師や官僚は専門家で客観的で患者を導く存在であるのに対し、患者は専門的な知識を持たず主観的に現実を把握してしまうとみなされる。知の体系や、行政の力を背景とし、専門用語で語る医師・官僚に対し、患者の語りはしばしば、感情的・一時的で、根柢が薄いとされる。このような文脈において、戦前期の優生学のような「科学」を装った強者の物語が、いかに人を傷つけるかを、患者自身が明瞭に言語化することは、きわめて難しい。だからこそ、当事者の語りを分かち合い、権威の語りに拮抗<sup>きつう</sup>させる必要がある。

当事者の語りは、本人にとつて救いやアイデンティティ構築になるだけでなく、聴く側にとつても恩恵<sup>おんゑ</sup>が大きい。病んではじめて、日常の意味を知ったと語る人は多い。わたしたちは誰もがいつか病み、弱り、死ぬ。患者の語りは、わたしたちの営む日常にどんな意味があるのか、わたしたちがどんな姿をしているのかを教えてくれる。患者たちの物語は、戦いのレトリックから距離をとり、自分の弱さや限界を受け入れてどう生きるかのヒントに満ちているのではないだろうか。

強いものが生き残るといふ、弱肉強食と自然淘汰<sup>じぜんたうた</sup>のイデオロギーは、社会進化論や優生思想といった科学の装いをまといながら、近代日本を貫く物語として機能した。このイデオロギーの消長を、結核を通して見ると、医学と政策が強者の物語を提示したのに対し、多くの文学は患者を悲劇的英雄・ヒロインにすることで、現実の恐怖を快樂のレベルに置き換えた。両者はおおむね、陰陽の関係にあると見てよいだろう。

一方で、当事者である患者たちは、病いを笑おうとした。病む自分を、距離をとつて眺め、仲間といっしょに笑いとばそうとした。それは正岡子規<sup>せいおか</sup>から患者たちへと受け継がれた遺産でもある。自分の弱さを見つめながら笑おうとする彼らの姿は、ひたすら強くあらねばともがく者たちよりも、深い知恵<sup>ちゑ</sup>をわたしたちに伝えているのではないだろうか。

(北川扶生子『結核がつくる物語―感染と読者の近代』による)

(注) 正岡子規……一八六七―一九〇二。俳人、歌人。「病牀六尺」などを書いて死に至る自らの病いと向き合い、文学を通じて新たな価値を創造した。

問一 傍線部(1)「誰かが諸悪の根源に仕立て上げられたりする」とはどういうことか。その説明として適切でないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 22。

- ① 現場の医療従事者が、感染者と接して治療を行なっているだけで感染源として特定されること。
- ② 生活の根幹を支える労働者が、通常の仕事を継続しているだけで感染を拡大させていると噂されること。
- ③ 学校関係者が、一斉にオンライン授業を行わなかったために病を広めていると非難されること。
- ④ 政治家が、適切な感染対策をとることができなかつたという理由により有権者の支持を失うこと。
- ⑤ 製薬会社が、利益を追求するために段階的に治療薬を売り出しているという理由で投石されること。

問二 傍線部(2)「これは偶然ではない」とされているのはなぜか。その理由として適切でないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 23。

- ① 結核のような疫病が蔓延すると、社会が不安定になるが、安寧を目指す国家の管理が軍事的にも医学的にも強化されるため。
- ② 結核のような疫病が蔓延すると、人心の不安が広がり、不安を暴力的に解消しようとして極端な方向へと進みやすくなるため。
- ③ 結核のような疫病が蔓延すると、撲滅する対象としての疫病を別の何かに置換して現実を理解しようとすることが起こるため。
- ④ 結核のような疫病が蔓延すると、健康を基準にして病を悪とする考え方が広まり排除する思想が生まれやすいため。
- ⑤ 結核のような疫病が蔓延すると、目に見える敵を別に作り、内憂を国外で晴らそうとする考え方が生まれやすいため。

問三 本文では、「病氣と戦う」「病氣を打ち負かす」「病氣に勝つ」など、病いがしばしば戦いの語彙で語られる事例が念頭に置かれ、戦時中に制作されたポスター(A)・ポスター(B)が紹介されている。ポスター(A)・ポスター(B)の説明として空欄アに入る最も適切な文章を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 24。

- ① 結核の害悪を呼びかける戦時中のポスター(A)(B)では、病氣と戦争は、ともに、撲滅すべきものとして提示された。このメタファーでは、健康と平和、健康と生産が同じものとみなされている。
- ② 結核の害悪を呼びかける戦時中のポスター(A)(B)では、病氣と戦争は、ともに、撲滅すべきものとして提示された。このメタファーでは、健康な意識と身体が国家と同じものとしてみなされている。
- ③ 結核予防を呼びかける戦時中のポスター(A)(B)では、病氣と米英は、ともに、人々が打ち勝つべきものとして提示された。このメタファーでは、個人と国家、健康と平和が同じものとしてみなされている。
- ④ 結核予防を呼びかける戦時中のポスター(A)(B)では、病氣と敵国は、ともに、人々が打ち勝つべきものとして提示された。このメタファーでは、個人の意識と身体が国家と同じものとみなされている。
- ⑤ 結核予防を呼びかける戦時中のポスター(A)(B)では、病氣と敵国は、ともに、人々が打ち勝つべきものとして提示された。このメタファーでは、対象と自己、意識と身体が同じものとみなされている。

問四 傍線部(3)「このようなレトリックは、人を追いつめる」のはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 25。

- ① 流行する疫病にかからないようにすることが親孝行になるという考え方は、親孝行に価値を置かない人々の心を傷つけてしまい、多様性を尊重する社会にならないから。
- ② 流行する疫病にかからないようにすることが将来につながるというメッセージは、患者には未来がないと言っているのと同じだから。
- ③ 流行する疫病にかからないようにすることによって健康で模範的な国民になれるというメッセージは、戦地で戦う兵士を増やして戦争を拡大することを是としているのと同じだから。
- ④ 流行する疫病にかからないよう健康に留意して過ごすことにより、親孝行はできたとしても模範的な国民にはなれないので。
- ⑤ 流行する疫病にかからないよう健康に留意して過ごすことにより、模範的な国民にはなれても親孝行にはつながらないのだ。

問五 傍線部(4)「深い知恵」の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 26。

- ① 俳句を通して社会に貢献しようとした正岡子規たちの叡智えいち
- ② 自身の弱さを克服して生き抜く力
- ③ 弱っている自分を突き放してユーモアを求める言葉の営み
- ④ きれいなことを言っても弱いものは弱いし強いものは強いという教訓
- ⑤ 強い弱いにこだわることに意味はないとする教訓

問六 本文の内容を説明する文章として適切でないものを、次の中から二つ選び、番号で答えなさい。ただし、解答順は問わない。解答番号は 27・28。

- ① 自国中心主義的な観念に基づく言動が多くなる戦争の時代には、病いと闘うことと戦争を遂行することがメタファーを介して重なり、そのどちらかが国民のためであるかのような情緒的な空気が生み出される。
- ② 暴力による問題解決を前提とする戦争の時代には、不安の拡大を利用して戦争への積極的関与を誘引するたくらみがなされる。
- ③ 憎悪の表現が好まれる戦争の時代に疫病が流行すると、病いと戦争がともに撲滅の対象となり、戦争への抵抗も生まれやすくなる。
- ④ 国民感情に不満が生じ、政府への支持率も低くなりやすい疫病の時代には、目に見える敵を作り優先を変えることにより憂さ晴らしができるので、戦争は為政者の権力保持のための方法になり得る。
- ⑤ 国民の身体に対する国家の管理が強化される疫病の時代には、国民の健康を守る環境を整えることよりも患者を排除して「非国民」を生み出し戦争の時代に突入することを選ぶようとする人たちがいる。
- ⑥ 戦争の時代に疫病が蔓延すると重症患者が増えて健康体で戦える兵士の数が不足し、対策が必要になるので、国家を挙げて感染を拡大させない環境づくりが推進されて疫病撲滅につながる面がある。
- ⑦ 疫病が流行する時代には、劣っている者や弱い者がその体質的な欠陥によって感染するという考え方が蔓延し、自己責任論が力を持ちやすくなり、異質な外来者を淘汰しようとする思想も生まれる。

〔二〕〈古文〉 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

問ひて云はく、「連歌は国の政の助けなどにも侍るべき」など申す人のあるは、<sup>(A)</sup>あまりのことにや。

答へて云はく、かへすがへすもこと新しき御尋ねかな。おほかた歌といへるは、政の悪しきをも、<sup>(1)</sup>正しくは申すことの恐れあれば、物に寄せて歌を作りて落とし文にし侍れば、国王諸侯もこれを御覧じて、国の政を直されしなり。唐の歌は毛詩といふ文もみなこの歌どもなり。

ア 申す人は罪なくて、国の政は直ることにて侍れ。我が国にも、<sup>(注3)</sup>日本紀の歌はみな童謡とて、<sup>(注1)</sup>落とし文にて侍るなり。万葉よりぞ、ただ月花に對したる歌は多く詠じ侍る。されば、<sup>(注5)</sup>古今の序にも、「その実みな落ちて、その花一人栄ふ」といふは<sup>(2)</sup>これなり。また、「まめなる家にはもてあそばず、色好みのなかだちとなれる」も、みな歌のやうやうすたれゆくさまを云へり。今の歌は、ただ花をもてあそび月をめだたるばかりにて、<sup>(注6)</sup>風・雅の姿のなきにや。連歌はまして世理に違ひ侍るまじきものなり。いかに面白き句にてもあれ、いささかも道理に背きたるはいたづら物なり。一字のてにはをも<sup>(注7)</sup>僻事を云はず、<sup>(3)</sup>正理にあてて案ずるを、<sup>(B)</sup>連歌の上手と申すなり。おのづから心の横さまに行きて、<sup>(注8)</sup>僻事の句だにも出でぬれば、そのあたりの連歌は七・八句もみな損じ侍ることなり。されば<sup>(注4)</sup>仏法も世法も道理といふ二つの文字にて侍るよし。慈鎮和尚もくれぐれ書き置かせ給ふなり。心正しく<sup>(注2)</sup>詞すなほならんずるは、まことに治まれる世の声にもかなひて、<sup>(注1)</sup>風雅の連歌にて侍るべきなり。

〔筑波問答〕による

〔注1〕 落とし文……人に言いたいのが公然とは言えない事を、匿名の文章に書いて、屋内や路上などに落としておくもの。

〔注2〕 毛詩……中国最古の詩集である「詩経」の異称。

〔注3〕 日本紀……「日本書紀」の異称。

〔注4〕 童謡……政治上の風刺や社会的事件を予言する意味を付加して、民衆の間で流行した作者不明の歌。

〔注5〕 古今の序……「古今和歌集」の仮名序。

〔注6〕 風・雅……「毛詩」の六義を元とする語。「風」は諸国の民謡を指すが、風論・教化の意に用いられ、「雅」は宮廷の樂を言うが、世の正しきを示し、偽りを正す意味で用いられる。

〔注7〕 てには……助詞・助動詞など付属語の類い。ここでは広く言葉の用法を指す。

〔注8〕 慈鎮和尚……慈円。平安末、鎌倉初期の天台宗の僧。慈鎮は諡。著作に歌集「拾玉集」や史書「愚管抄」などがある。

問一 傍線部(A)・(B)の意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は(A)は 29・(B)は 30。

- (A) あまりのこと
- ① それほどのこと
  - ② 余計なこと
  - ③ おおげさなこと
  - ④ ゆとりのあること
  - ⑤ はなはだしいこと

29

- (B) いたづら
- ① ふしだらな
  - ② 手持ち無沙汰な
  - ③ 物足りない
  - ④ 価値がない
  - ⑤ 悪ふざけな

30

問二 空欄 ア に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 31。

- ① さてめや
- ② さてさて
- ③ さては
- ④ さておき
- ⑤ さてこそ

問三 傍線部(1)「正しくは申すことの恐れあれば」の意味として、最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① きちんと言うことを憂慮するならば
- ② まっすぐにおっしゃることに畏怖を感じるので
- ③ 正確に伝えることに心配があるならば
- ④ 誤りなく報告することに自信がないので
- ⑤ まともに申しあげることには遠慮されるので

問四 傍線部(2)「これ」の説明として、最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 『万葉集』以降は、政治上の風刺をせず、花や月をめぐる歌を多く詠むようになったこと。
- ② 『日本書紀』においては、政治上の風刺や社会的事件を予言する意味を加えて歌を詠むこと。
- ③ 『毛詩』の歌はみな自然景物を取り上げながら、実は政治を風刺するように詠むこと。
- ④ 政治の問題点がことごとく是正され、正しい政治だけが残り、太平の世になること。
- ⑤ 国王や諸侯は落とし文など政治を風刺した歌を排除し、自然を詠む歌だけを好んだこと。

問五 傍線部(3)「連歌の上手」の説明として、最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 面白さより文法や言葉遣いの正しさを守る人
- ② 正しい道理に照らして句を考え丹念に作る人
- ③ 全く道理に背かない句が面白くないと思う人
- ④ 心が違った方向に行かないように自ら慎む人
- ⑤ 間違った句が出来たら七・八句も作り直す人



問六 本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 35。

- ① 仏法も世法も根底には道理があり、それを連歌に詠むことはそのまま政治に貢献すると論じた。
- ② 和歌が衰退した原因を風諭性の消失にあると指摘し、連歌では必ず風諭性を実践するように強く勧めた。
- ③ 『毛詩』や『日本書紀』などにある落とし文は政治が混乱した時代の産物であり、今の治世には不要だと主張した。
- ④ 花や月など自然を詠むことは治世の美しさを詠むことと矛盾せず、どちらも風雅な事だと認めた。
- ⑤ 連歌が国の政治の助けになるかという問いに直接答えず、道理に従って作ることの重要性を強調した。